

## 囲碁について

小嶋祥三

アタマの老化防止でもないが、最近囲碁をやることが多い。週 1 回近所の囲碁サロンで打っている。囲碁を覚えたのは霊長研時代で、30 歳半ばだったように思う。京大の囲碁部にいた大学院生と、知識のある同僚が教えてくれたように記憶している。まだ若かった助手 3 人と技官と一緒に教わった。差し障りがあるといけないので、わたし以外の名前は A, B, C とする。A 氏は定石の大切さを学び、石を並べていた。むろん、わたしも並べた。時折、皆で対局をしたが、A 氏は次第に対局から遠ざかってしまった。しかし、盤の横にいて、アレコレ意見を述べるようになった。B 氏は負けると不愉快になる傾向が強いのか、やはり対局から遠ざかった。それでも、テレビの囲碁対局を観て感想を述べていた。B 氏の結婚祝いに送った碁盤が、電気スタンドの台に化けた。C 氏は一所懸命に覚えようとしていたが、夢の中にも碁盤がでてくるので、苦しくなって止してしまった。さて、わたしは負けると悔しいのだが、勉強と思い、次回は・・・と考えていた。むろん、夢にも出てきた。が、特に苦しくはなかった。というわけで、なんとか恰好がついたのはわたしだけだった。わたしは勝負事が好きなんだろうか？

わたしにとって、霊長研の土曜日の午後は囲碁の時間だった。京大の自然人類学教室は囲碁の好きな人が多く、それは霊長研にも引き継がれていた。わたしの実力は自称初段の同僚に、もう少し、というレベルだったように思う。ただ、同じレベルだった若い大学院生が腕をあげ、わたしをスイスイと追い越していった。仕方のないことである。囲碁、将棋のプロは子供の頃からそれらに引き寄せられるようだ。才能なのだろう。結果が明確な厳しい世界だろうけれど、やりたいことがはっきりしているのは幸せかもしれない。フツウの人はやりたいことを探すのに苦勞する。加えて、このような難問は考えたところで答えがでるものでもない。わたしは本能的にそう思っていたのか、この種の問題で悩むことはなかった。やりたいことをやるようにしてきた。結果については何も考えていなかったように思う。高校の時は理系だったが、大学受験を全く考慮に入れず、好きな地学と化学を選択した結果、受験可能な大学学部が少なく、チョット焦った。ただ、ある道を選んだからには、それなりに努力したつもりだ。それで何とかやって来られたのは幸運だったのだろう。慶應義塾に移って、ゼミの学部生からこの種の相談を受けたが、自分の経験から、やりたいことをやればいいと内心想うばかりで、うまく対応できなかった。

さて、慶應義塾に移ると誰も囲碁をやっていなかった。そんなわけで、10 年ほど囲碁はお休み状態だった。再び囲碁を始めたのは、高校の同級生に囲碁好きが二人いたからである。一人はわたしより少し上か、同じ実力だった。Ta 君としておこう。かれは日本棋院の初段の免状を持っている（本人は「買った」と言っているが・・・）。もう一人の To 君はとても強く、わたしは 4 子も置かされている。月に一度ほど集まって碁を打ち、その後「反省会」と称して、お酒を飲んでいる。わたしはかれらに連れられて、初めて碁会所という

所に行った。その第一の印象は老人が多いなということだった。日本の囲碁は韓国や中国に追い越されているようだが、若い囲碁人口が増えないと、先は暗い。科目に囲碁を取り入れている大学もあるようなので、これからに期待したい。

これまでの文章で、わたしの碁の実力はお分かりいただけると思う。ただ、ネットの碁に参加してみると、3, 4 レベル下げたところが実際の実力のようだ。3 級程度ではないだろうか。わたしは正式に囲碁を習わなかったので、石のカタチで判断できない。いちいち手を読まなければならないので、一手打つのに時間がかかる。相手に迷惑をかけることになり、心苦しい。読む訓練にはなったのだが……。通っている囲碁サロンの席主の評では、わたしは「奇抜」な手を打たず、普通の手を打っているならばかなり強いのだそうだ。わたしはヒネクレタ性格なのかもしれない。自分の碁を省みると、盤面全体を見ず、局所戦に終始しているような印象だ。局所戦が好きなのだ。局所戦には勝ったが、数えてみたら 10 目も負けていたなどということが時折ある。

わたしは緊張すると指先が震える癖があった（そういえば、子供の頃から最強度のアガリ性だった）。高校の同級生と打っていて、震えが酷いので笑われた。ただ、わたしにとって震えるのは、勝敗にこだわっているのではなく、それだけ気合が入っているだけのことなのだが。ネットの碁で手が震え、とんでもない所に石が行ってしまうことがあった。待った、は効かないので、どうしようもない。囲碁サロンに通うようになって、手も多少早くなり、震えも減ってきたように思う。気合いが減ったというよりは、慣れてきたのだろう。ネットの碁を観戦していると、朝から晩までやっている人を見かける。碁会所がそうであるように、退職した高齢者が多いのだろう。アタマの体操、老化防止になっているか分からないが、しばらくは続けるつもりだ。